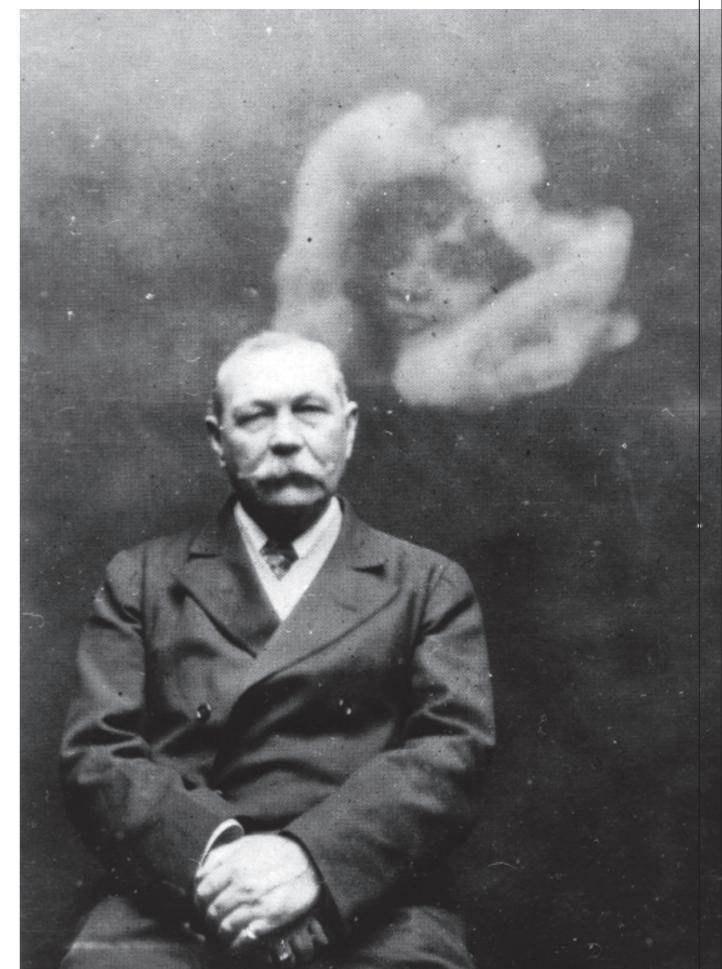


# 光明へから闇

## コナン・ドイルとスピリチュアリズム

### 横山茂雄

(英文学者)



「靈」と共に写るドイル。1922年頃撮影。© Alamy Stock Photo / amanaimages

コナン・ドイルは、論理的な推理小説とは裏腹に、心靈主義の著作も多く残している。主人公が心靈実在論者に改宗する『霧の国』をはじめとするスピリチュアル作品の発表は、彼が正常な判断力を失ったという疑惑を世間に抱かせた。だが、ドイルの人生を俯瞰してみると、ある一つの信条を守りぬいていたことがわかるのだつた。

#### 「わたしは憶測など絶対にしない」<sup>注1</sup>

（『四つの署名』コナン・ドイル著）

コナン・ドイルが一九世紀最後の年に発表した短編小説の一つに「危険な遊戯」（原題は“Playing with Fire”、一九〇〇年）と題する秀作がある。ただし、ミステリーではなく交靈会を題材とした超自然譚なので、さほど広くは読まれてはいないだろう。

未読の方のために筋は明かさないでおくが、この作品の登場人物の一人ジョン・モイアの設定はさわめて興味深い。すなわち、実務家であるモイアは、同時に、「スピリチュアリズム」という名称の下に一括される捉えがたい現象<sup>注1</sup>を

熱心に調べてきた男である。だが、偏見をもたずに始められた研究は「不幸にも頑迷な教義と化してしまい、彼はいまや「独断的、熱狂的」な信者となつていたというのである。

この作品の発表から十数年後、皮肉なことに「うべきなのか、ドイル自身が、モイアと同じように、スピリチュアリズムの「教義」を「熱狂的」に信奉するようになり、あらんかぎりの時間と資力を傾けて、死後の生の実在を伝道宣布することになる。彼はスピリチュアリズム関係の書物を執筆するだけでなく、アメリカ、オー

ストラリアなど海外各地で長期の講演旅行を行い、専門書肆サイキック・ブックショップまで設立した。小説のほうでも、徹底した唯物論者であるチャレンジャー教授が心靈実在論者へと改宗する『霧の国』（一九二六年）を著した。ドイルの考えでは、スピリチュアリズムとは「キリストの死このかたに起つた宗教上の最大の出来事」であり、「死についての見解と人間の運命を変革する啓示」に他ならない（『新たな啓示』（一九一八年））。もちろん、この転身は彼の友人知己だけでなく世間に大きな困惑や驚きを与えた。嘲罵<sup>ちうば</sup>非難<sup>ひなん</sup>をも惹き起こした。

これにともない、第一次世界大戦で肉親を失つた悲嘆のあまり、名探偵シャーロック・ホームズの創造者は、理性や正常な判断力を失つたのだという俗説が生まれた。のみならず、この説はそのわかりやすさゆえに今なお流通しているのかもしれない。しかし、生前のドイル自身が繰り返し主張していたとおり、これは事実に反する。

いわゆる心靈現象、超常現象についていうならば、彼はすでに一八八〇年代中期からその真剣な研究に着手していた。つまり、こういった領域へのドイルの関心は晩年になつて唐突に生じたのではなく、二〇代半ば頃までにさかのぼ

る。また、幽界との接触を信じて疑わないと彼が公言したのは戦火の続く一九一七年、五八歳のときだが、確かに数人の親族がその頃までに戦死したとはいえ、最も大きな打撃であつたにちがいない長男キングスリーおよび実弟イネスの死はいずれも一九一八年秋以降のことなのである。

だが、最も重要なのは、ドイルのスピリチュアリズムへの全面的な帰依は、彼が思春期から長年にわたつて抱えてきた宗教上、思想上の煩悶と不可分の関係にあつた点だろう。しかも、その煩悶とは、ドイルのみならず、一九世紀後半に少なからぬ数の欧米知識人たちが直面した精神的な危機に根ざしている。

### 超常現象研究協会の設立

近代スピリチュアリズムは、一九世紀中葉のアメリカに端を発する。一八四八年、ニューヨーク州ハイズヴィル在住のフォックス家では説明のつかない不思議な物音に悩まされていたが、一家の一〇代の姉妹が試しに指を鳴らしたり手を叩いてみると、「音」の側でもそれに反応してきただのである。原始的な交信方法——質問を発した際、たとえば「イエス」なら「音」は二回鳴

りかけるようになった。自動書記も開発された。タンバリンが音を上げながら空中を舞つた。物品移動、物品引き寄せ、物質化現象などが、靈媒を囲む仄暗い部屋の中でもはや普通に見られる光景となつた。史上最大の靈媒と称されたヒュームにいたつては、空中に浮揚したという目撃証言まで残つてゐる。かくて、一八六〇年代から七〇年代にかけては、欧米におけるスピリチュアリズムの狂熱は絶頂期を迎えた。